

【2月の気象】

2月上旬は1月下旬から続く1年で一番寒い時期です。暦では節分（本年は2月3日）を迎え、翌日の立春の名のごとく春へと進み始める頃となります。日本の南岸を通過していく低気圧（南岸低気圧）の影響で、愛媛県の広い範囲で大雪になることもあります。

一方で、低気圧が日本海を発達しながら通過すると、春一番が吹き、気温が上昇することもあります（図1）。

四国地方の春一番は以下を基本として総合的に判断しています。

①期間は、立春から春分までの間。

②低気圧が日本海付近にあって発達し、南寄りのやや強い風が吹く（最大風速：概ね10メートル以上）。

③最高気温が前日より高くなる。

「春一番」が吹いたあとは冬型の気圧配置となる場合が多く、一転して寒気が流れ込むため、気温の寒暖差が大きくなり注意が必要です。

2月は、気温の変化（寒暖の差）が大きくなる月です。農作物の管理には、週間天気予報、1か月予報及び早期天候情報等を活用してください。

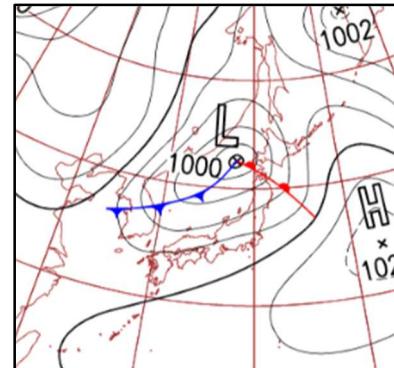


図1 春一番の典型的な気圧配置

【気象用語】「南岸低気圧による雪」

松山など平野部で大雪になる気象要因として、南岸低気圧があります。松山における降雪の深さ日合計の多いほうからの1位から3位は南岸低気圧によるものです。

南岸低気圧というのは、西日本の南海上を低気圧が東北東に進む気圧配置が一般的です。南海上を低気圧が通っていくことは季節によらずありますが、冬期の南岸低気圧は予報官泣かせの厄介者です。

予想が難しい理由は、低気圧の通るコースや発達の度合い、上空の寒気の程度、地上付近の気温、湿度など、様々な気象要因が絡みあい、雪か雨の違いが出てくるためです。雪となり積雪になるかどうかは、社会的影響や農作物への被害も大きく異なります。四国の南、概ね北緯30度から33度付近を低気圧が通過する場合に雪になると言われていますが、四国の太平洋沿岸を低気圧が通過する場合は暖気の影響で、平野部では雨が主体となります。一方で、低気圧の位置が遠すぎる（南海上に離れて通る）場合は、雨や雪がほとんど降らない可能性があります。850hPa（約1500m）よりさらに地上に近い所の気温に着目し、雪が解けずに地上まで落ちてくる条件かどうかを確認します。地上の気温は1~2度あたりが雪／雨の境目になることが多く、湿度が低い方が雪になりやすいと言われています。

松山で最も1日の降雪量が多い14cmを記録したのが1984年1月31日で（図2）、低気圧は北緯31度付近を東進しました。瀬戸内側では高松23cm、広島26cmと大雪となっている一方で、宇和島では0cmと低気圧に近いことで雨が主体となっています。アメダスの日降水量は20~40mmで、日最高気温や当時の気象台資料を参考にすると、東予や中予では10cmを超える積雪となり、南予でも内陸部を中心に積雪となっている地域があります。低気圧のコースや少しの気温の違いで、雪と雨を分けている事例です。

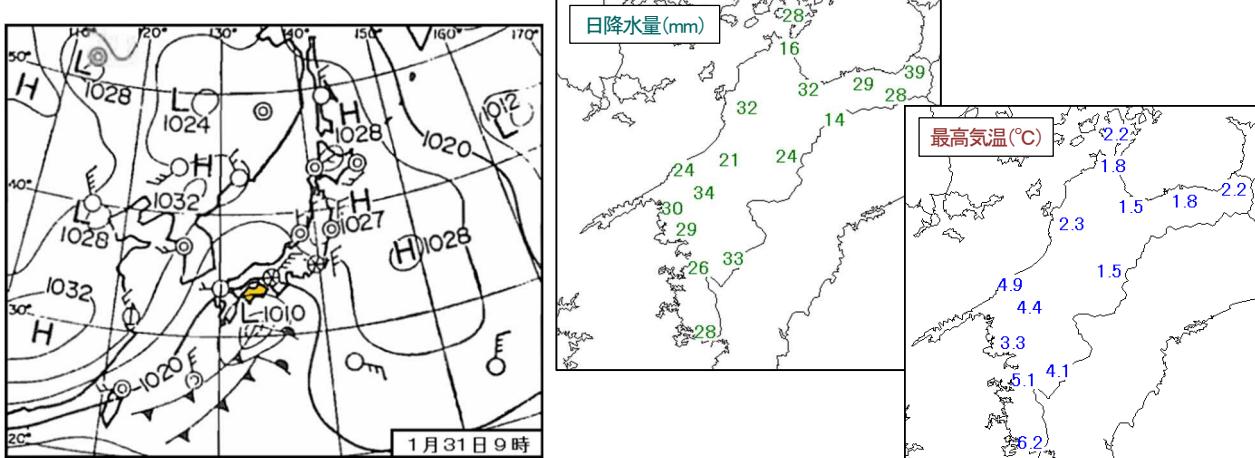


図2 南岸低気圧で大雪となった1984年1月31日（左図：9時の天気図、中図：日降水量、右図：最高気温）